

『手には届かぬ確かなもの』

—天高く猫眠る星Ⅱシリーズ 2—

第一章 「マックスウエルの悪魔」

ゆっくりと戻りかけている意識の中でやたらと懐かしい声が響いてくる。それは自分にとって一番幸せな時の思い出なのかもしれない。そして、やたらとフワフワとした感覚が周囲を取り囲んでいる。どこかに浮いているような感じ、そして暖かさを感じる。しかし、目を開けることも手を動かすこともできない。

不意に重力を感じて再び暗闇の中に突き落とされる。しかし、次の瞬間には私はとある場所にいた。目の中に光が飛び込んでくる。ゆっくりと開けた目の中に映し出された景色。一瞬、それがどこであるか理解することが難しかった。少なくとも見覚えがある風景…あの絵はがきの風景であることは間違いない。

周囲を見回そうとして、なにか様子が違うということに気がついた。いつもの視界と違う。やたらと地面に近いところから見上げているような感じがするのだ。もしかすると、まだ夢の続きなのか…、それとも誰かに強制的に見せられている映像なんだろうか。

そこが草原であることは確かだった。かなり背の高い草が遠くまで生えている。私はその一際高い場所から周囲を見下ろしていた。いや、もし、平地だったらこの草に覆われて何も見えなかったかもしれない。ちょっと離れた場所に大きな木が立っているのが見える。どうやら、そこに何かが集まっているようだった。もしかするとシュレーディンガーたちかもしれない。そうすると、今見ているこの映像もシュレーディンガーたちが見せているのか…。

湯浅大尉たちは無事にグレン大佐と合流できたのだろうか？シュレーディンガーとは会えたのか？いくつかの疑問が頭の中を渦巻いて、まだ自分が正解にたどり着いていないことに気がついた。あの絵はがきは誰が送ってきたものなのか？グレン大佐は何を知っているのか？そして、これから何が起ころうとしているのか？私は何をすればいいのだろうか？

「にゃーん」

すぐ耳元で猫の声がする？ゆっくりと視線を右後ろに移して、そこに一匹の白猫がいることに気がついた。・・・と、同時に自分も猫であることに気がつく。どうも視界が低いのはそのせいのようなだった。白猫はついて来いというような仕草で、大きな木の方に向かって歩き出す。時々、私がついて来ているか確認するように振り返っている。

ここでようやく私は頭の中で整理をし始めていた。どうやら理由はどうであれ、私はいま猫の姿のようだった。意識だけがこの猫の中に入っているのかもしれない。そして、この白猫は私をエスコートしてくれているようだ。たぶん、シュレーディンガーたちは特殊能力を使って私をここに連れてきてくれたのだろう。さらに言うなら、私にはまったくこの先の未来が見えていなかった。本当に自分の能力は消え去ったものと認めざるを得ない。

「にゃーん」

白猫は木の傍まで来た時に誰かに伝えるかのように大きく声を出した。木の周りにはたくさんの

猫たちが集まっているが、どうやら伝えたい相手は猫たちではなく、その大きな木だったようにも見えた。

「ユメ、ありがとう。連れてきてくれたんだ。」

どこかで聞き覚えのある日本語……。しかし、人の姿は見えない。

「ワキさん、たぶん聞こえているものとして一方的に話すね。この小惑星帯にはマックスウエルという名の悪魔が封印されています。これまで猫たちのおかげで最悪の事態は防ぐことができていたんだけど、もう猫たちもこれ以上は押さえきれないという状況までできてしまった。今はあたしが代わりに封印しているけど、それもいつまで持つかは分からないし、なんとかしなくちゃ世界がめちゃくちゃになるのは間違いないの。お願い、あたしたちに力を貸してほしい。あたしたちと一緒にマックスウエルを倒す方法を考えてほしい。でも、ワキさんがここに来ることはできないことだけは忘れないで。」

ああ、この声は *My a* か……。どうりで聞き覚えがある筈だ。しかし、相変わらず声だけで姿は見えない。

正直言って聞きたいことは山ほどあった。しかし、彼女の言葉からは時間がない様子がよく分かる。ここで時間を割いてでも伝える必要がなければ、わざわざこんな面倒なことはしなかったのだろう。私は何があっても彼女の保護者でなければならぬと思っている。その彼女の願いは必ず叶えるつもりだ。

しかし、どうやって彼女にそれを伝えたらいいのか分からない。何しろ声がまったく出ないのだ。「大丈夫、ワキさんの考えていることは伝わってくるから。ありがとう、きっとそう言ってくれると思っていた。詳しくはシバちゃんから聞いてね。あたしはもう少しここにいななければならないけど、彼女が近くにいてくれればいつでも話しをすることができるから。」

彼女にテレパシー能力を持たせた記憶はないので、今の会話も柴野さんによるものなのか、それとも別の力を借りているのかどちらかだろう。この猫たちも意外と侮れない力を持っているので、なんとも判断ができないところは少しばかり口惜しい。

しかし、今回のことに彼女が関係しているということは微塵も考えていなかった。しかも、*My a* ははっきりと私はここに来られないと言った。ということは、私がキャットテイルXでイライラしなければならない原因を作ったのは彼女ということになる。いや、それ以前にあのハガキを送ってきたのは彼女ということになるのか。

一つ分かったことで、たくさんの疑問が次から次へと湧いてくる。しかし、彼女は柴野さんからそれを聞くようにと言っているのだ。どうして、彼女が直接私に説明できないのかも分からない。「今は分からないことが多いと思う。でも、すぐに情報が増えてくる。その時にワキさんには *POWLA II* の近くにいて欲しいんだ。だから、ワキさんはセベリア・フィールドの外側にいてくれないと困る。あたしは大丈夫だから……。」

うーん、どうやら私の思考は彼女には筒抜けらしい。まあ、そういうことなら彼女の言うとおりにするしかないだろう。彼女の情報収集能力については、こう言うてはなんだが私のお墨付きだからね。

しかし、見事なまでにここには人工物が見当たらない。これだけのシュレーディンガーの猫たちが生活していくためには、それなりの活動があって然るべきなのだ。ところが植物以外の生命活動があるようにはまったく見えない。そもそも、こんな小惑星に大気が存在することだって異常なこ

となのだ。いったい、どこから重力が発生しているのだろうか？

そして、おもむろに嫌な考えが頭の中を駆け巡る。まさか、ここは小惑星ではないのではないだろうか？

「ワキさん、あたしたちはグレン大佐を収容して一旦キャットテイルXへ戻ります。詳しい説明は戻ってから行いますね。」

柴野さんの意識が流れてくる。そこであることに気がついた。柴野さんの意識が流れてきたと同時に頭の中にはライムグリーンの色で染まったのだ。さっき、*My a*の意識が流れてきた時はマリンブルーだった。どうやら、この猫たちは他の固体をこんな風に色で識別しているのかもしれない。

相手の意識は一方的に受取れるものの、だからと言ってどうやって返事をするのかも分からないので、そのまま放っておくことにした。だいたい、私は自分の帰り道さえ分かっていないのだ。

帰り道が分からないというのが伝わったのか、先ほどの白猫がすり寄ってきた。どうやら、帰りも道案内してくれるようだ。しかし、いつまでこの姿でいればいいのか？*My a*が言うには私はセベリア・フィールドの外側にいなければならないようだし、もしかするとだが今回はかなりきつい任務になりそうな気がする。

風がゆっくりと流れる。風は不思議な香りを運んでくる。私はその香りをよく知っていた。

第一章 「マックスウエルの悪魔」

H18. 13. FEB